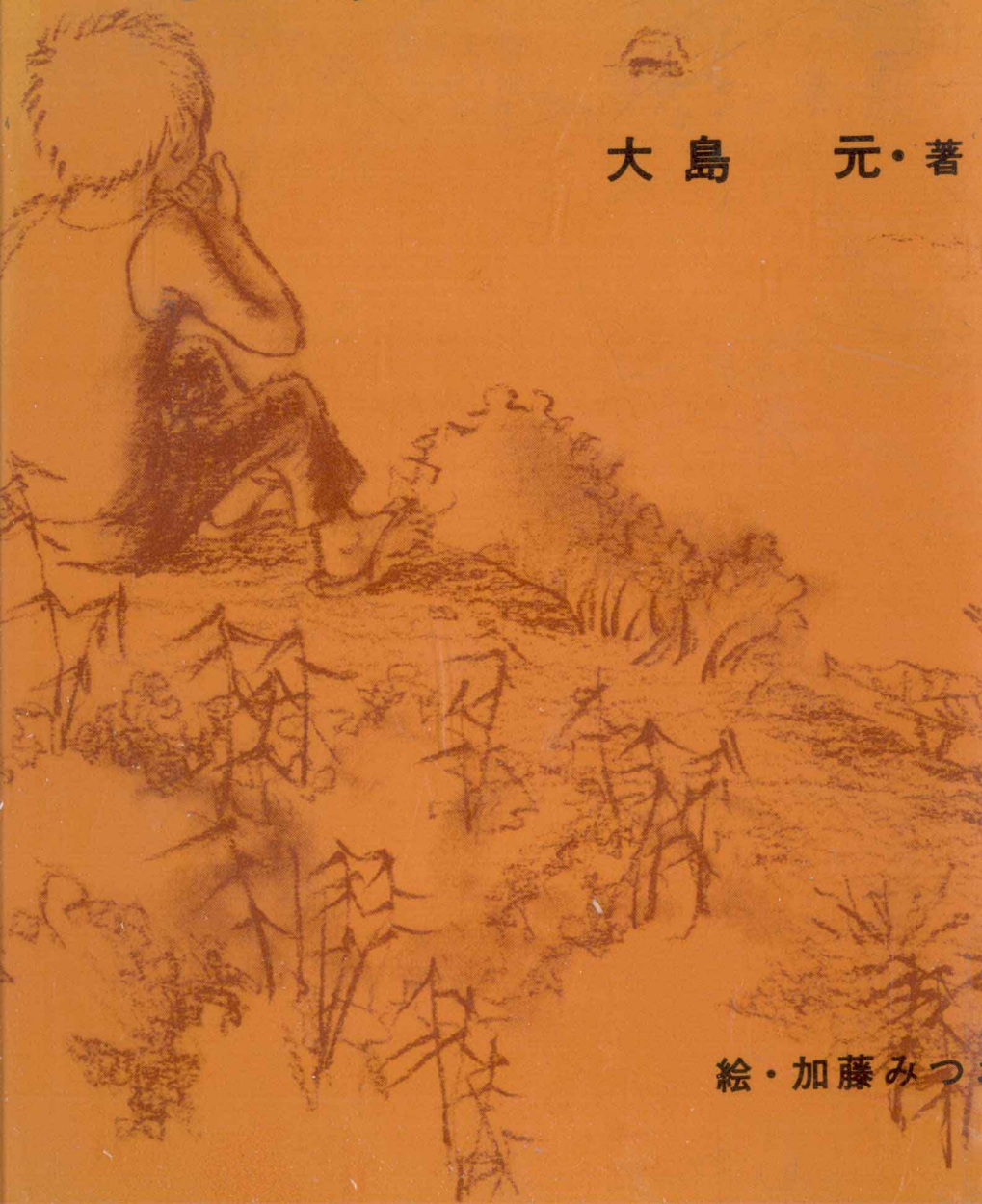


権次と葉笛

大島 元・著



絵・加藤みつ

権 次 と 葉 笛

昭和48年12月25日印刷

昭和48年12月25日発行

著 者 大 島 元
埼玉県比企郡滑川村月輪476
(電話 嵐山049362-2615)

印刷所 (有) 秩 父 プ リ ン ト 社
代表 大 島 功 八
秩 父 市 野 坂 町 1 - 16 - 6
(電話 秩父04942 (2)1580)

発行所 ち ち の 木 の 会
秩 父 市 中 宮 地 町 6 - 18
(電話 秩父04942 (3)4882)

(実費頒布)

権次と葉笛

目次

第一章 入学式

44

第二章 布

団

49

第三章 ぬすまれた赤んぼ

85

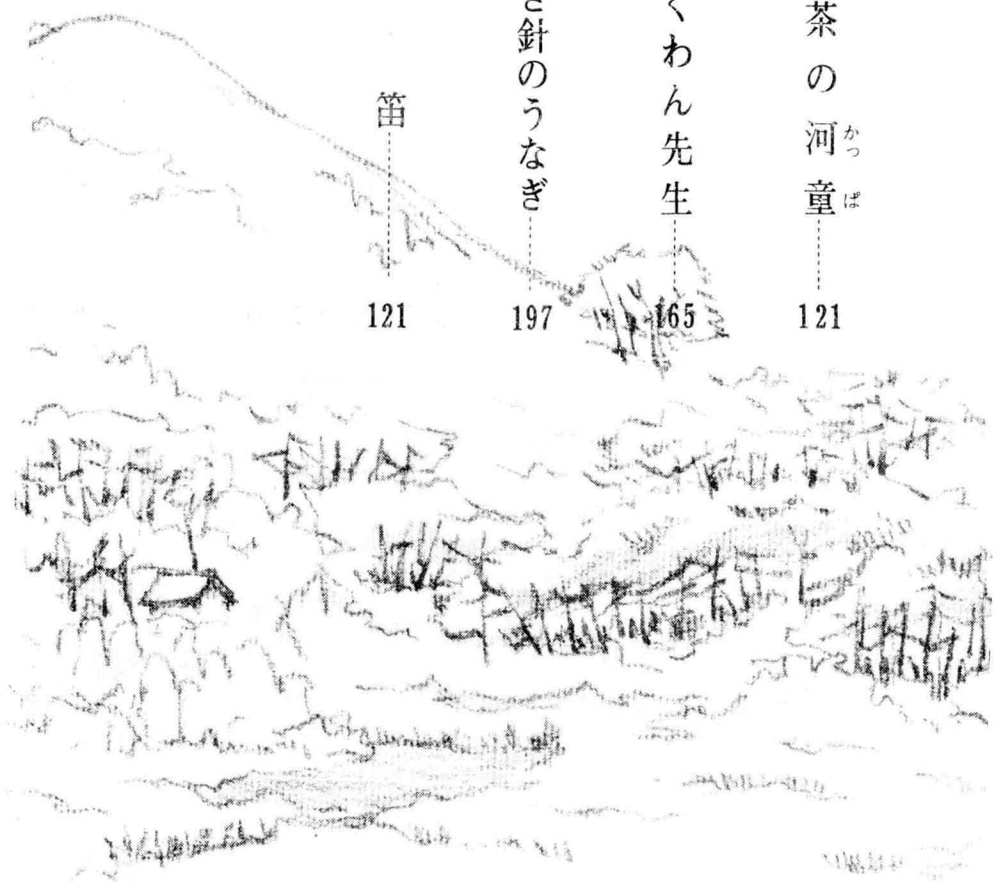


第四章 赤茶の河童^{かつば} 121

第五章 たくわん先生 165

第六章 置き針のうなぎ 197

第七章 葉笛 121

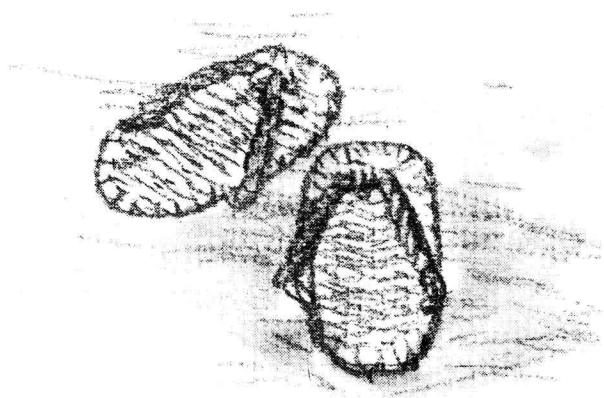




絵・加藤 みつお 一九五四年一

月 埼玉県東松山市に生まれ
る。高校卒業後上京、創作活
動に入る。おちゃづけ工房代
表・現在東京在住

第一章 入学式



一、入學式

秩父にほど近く、四方を山にかこまれた面積一万平方米、人口四千ほどの大きくもなければ小さくもない、地下足袋の足跡のような形をした村があった。この村は東西に長く、村の七分通りがでこぼした山にかこまれ、平地はほとんどなく、山と山との間に田畑がちらほら見うけられ、これとした特産物もない平凡な村であった。村を二分するように、村の中央を八高線が横切っていた。これがこの村唯一の交通機関だったが隣村まで出かけなければ八高線の駅はなかった。しかしこんなへんぴな村にも宿しゆくと言うにぎやかなところもあった。街まちのようににぎやかな場所ので、そこには村役場もあれば、農業協同組合、駐在所、小学校、中学校、映画館、魚屋、八百屋、洋服屋、電気屋、ラジオ屋、下駄屋、鍛冶屋、薬屋、そば屋、郵便局、製材所、これとしないものはなかった。ここがこの村の心臓部であって、小作りな街まちの形をつくっていた。そんなことから村人たちはこの宿しゆくのことを「まち」と呼ぶ。ここまでくれば隣の町まで買物に出かけなくも一切がことたりるからだった。村の両端を流れる都幾川は、むかしと変りなく今もきれいな水が、みがかれた岩間をぬって静かに流れている。

村は多摩川、日形、黒田、小倉の小部落にしきられ、その中でも小倉部落が一番へんぴな所にあつて、村一番山奥だつた。小倉からでは隣町まで出かけるにも、宿しゆくまでいくにも八軒ほど歩かねばならなかった。すり鉢をさかさにしたような山にかこまれたくぼ地に、はき残されたように麦わらの屋根が散在していた。ここが小倉部落で、部落の後に小倉山がしゅういの山より一段と高く、風よけのようにつき出していた。この小倉山の中腹に学校が建てられていた。

学校といつても全校生徒二十三人と言う分教場で県下まれの学校とされ、先生も二人しかいなかった。教室も二つしかなく、一・二・三年生で一組、四・五・六年で一組という学級編成で、複々式授業がなされていた。

学校の窓をあけると、すぐ眼の先に大平山、塩山がよこたわり、眼下に槻川の美しい流れが、たこの頭のようにぬつとつき出た嵐山半島を、ぐるりととりまいて流れていた。ここが観光地として名高い嵐山で、大平山、塩山との間に芝生をしきつめた半島が、め松を散らしてつき出ていた。この嵐山は、京都の嵐山にその景がよくにているということから嵐山と名付けられたと伝えられている。

春は一般の花見客でにぎわった。近在の学校からもたくさん遠足にやってきた。夏になると、大平山の中腹から嵐山半島の芝生の上に、三角のとがった犬小屋のようなテントがいくつもはられ、夜中まで笑い声や歌声でにぎわった。秋には紅葉がりの人たちや、ピクニックに来る都会の人たちの安楽の地として名高かった。こうして春から秋にかけて人のたえることのない嵐山も、冬になると、死んだような静かな場所になっていた。観光地といつても、温泉地ではないからである。こうしたこの観光地は槻川が村境になっていて、この小倉部落ではなく遠山村になっていた。

嵐山にうぐいすの声が始まると、小倉部落にも春がおとずれて来た。分教場の梅の花がほころび、やがて散り始める頃になると、大平山、塩山の木々が青い芽をふき出す。山桜の花が、松の緑の間から人目を引き始め、何人かの花見客が半島に見え始めると、静かだった小倉部落もいくらかにぎやかになっていった。半島がにぎやかになると、子どもたちは、みんな半島の芝生にやって来た。客が帰った後には、ビールやサイダーの空瓶がいくつもころがっているからだった。子どもたちはそれを、われがちに拾い集めた。そして川南にある小掛山に小店を出している、利八老人のところへ持っていった。

子どもたちがこのように、空瓶集めをするようになったのは、利八^{りは}老人の勧めがあったからだ。利八^{りは}老人はいつも客の引けた後、散らされた嵐山^{らんざん}半島をしまわりして、紙くづや、空瓶を拾い集め、次におとずれる人がいやな思いをしないようにと、心をくばっている老人だった。

利八^{りは}老人には子どもではなく、腰の曲ったバアヤと二人暮しだった。そんなことだから利八^{りは}老人は、半島に遊びに来る子どもたちを、だれかれとなく自分の子どものようにかわいがった。そうした利八^{りは}老人の心持ちがいつしか遊びに来る子どもたちにも通いはじめ、時折り利八^{りは}老人の後についてまわって手助けをするようになっていった。そうした子どもたちに利八^{りは}老人は何か張りを持たせようと、紙くづ集めと合わせて空瓶を拾わせ、その代償として拾った空瓶を買い入れてやることにしたのだった。

「こ年も花見客、たくさんくんべエナ」

「きよ年は雨にやられたで、何本も拾えんだった」

虎刈頭の少年は、そう言いながら半島の方に眼を向けた。ぐりつとした大きな目玉の中にどことなく古臭い、淳朴な農村の感じがあった。尻の上に縞^{しま}のよごれた風呂敷包が、ちょこなんと結びつけられていた。

「きよ年は権次が一番、たと拾ったナ」

小柄で、悪気のなさそうな少年は、あご紐のない帽子をぐるぐるまわしながら、権次という虎刈頭の少年を見上げながらいった。

「甚吉だって三十銭もためたでねえか」

二つ年下の甚吉に一番だったといわれると、権次はまんざらいやな気もしなかった。そこで権次も、甚吉の三十銭

ためたことをほめてやった。

権次は今年六年生で、分教場の最高学年だった。分教場から中学や、本校の高等科へいくようになると、今まで夢中になって空瓶集めをしていた子どもたちも、ピタリやらなくなってしまった。学校も遠くなるし、学校の帰りもおそくなる。そればかりではない。中学や、高等科に入ると、急に大人になったような気持ちになるからだ。小さな子どもたちと遊ぶことが、いかにも子どもどもとして、てれくさく感じられるからでもあった。しかし、中学や高等科に入りたての頃は、分教場の時のようにみんなして、半島へ出かけた気持もないわけではなかったが、笑われるような気がして、急に、よそよそしくなっていくのだった。権次たちにはそうした先輩のよそよそしい気持ちは解らなかった。中学に入った新吉も、高等科にいった春夫や熊次も、権次たちとは遊んでくれなかった。権次は、はねのけられたように思えて淋しかった。けれど、分教場の六年生になると、学校のことばかりではなく、なんでも大將になれることはうれしかった。半島へ、みんなをつれていくのも六年生だった。それに週番という役目もあった。週番になると、月曜日の朝礼には朝礼台の上に立って号令もかけなければならなかった。そればかりではない。ラジオ体操の指揮もとらなければならなかった。

権次は一種の不安もあったが、心はずんでいた。

「みんな おそいナー」。

権次は、待ちわびるように言った。

満福寺の庭が、学校へ出かける前の集合場所だった。いつもなら、一番遅い権次だったが、けさはめずらしく早かった。権次は久しぶりに、黙龍和尚のたたく木魚の音を聞いた。和尚は、権次が来たら朝のおつとめをすませたの

だった。権次はここ半年ほど、和尚の読経を聞いたことはなかった。

「権次か、めずらしいこともあるもんじゃ、ほれ、見ろ、ご本尊様がお前の顔を見て笑っておるぞ、ハハ……。」
黙龍和尚は、本堂をのぞき込んでいた権次を見ながらそう言うのと、笑いながら奥の方に入っていった。

「今度、和久平のとこ、三人学校だナ。」

「三吉が一年生で、孝助が四年で、和久が五年だ。」

「和久と孝助、今度から同じ組だぞ。」

「これから和久平のやつ、孝助に、頭があがらなくなるぞ。孝助はよくできるし、先生にさされて答えられないとみんな孝助に解ってしまうでナ。」

「宿題も、忘れられないぞ。」

「今までのように、立番ばかりしてはいられない。」

二人が話しているところへ、いつ来たのか、権次と同じ六年生になったのん子が、横あいから口を入れた。

「あまり、人のかげ口、きかん方がええで、権次だって、よく、立番もらうでねえかヨ。」

色の浅黒い顔に、どこか勝気なところがみられる女の子だった。のん子に、そう言われると、権次はきつとなって、
「だまれ。」

と、どなり気味に言った。権次もよく、宿題は忘れる方だった。和久平のことどころではない。今までに何度、教室のすみに立たされたか知れなかった。のん子にまあ言われても、なんともいえない権次だったが、のん子に、馬鹿にされたと思うと、腹が立ってならなかった。権次はのん子の髪の毛が、後で、ちょこなんと二つに結んであるのを見

ると、それを見のがさなかった。

「兎のしつぽ」

高等科に通っている女の子がやっているような、結び髪にするつもりで、少し無理な髪の手だったが、おしやれなつもりで、やっとゆわえてきたのん子だった。それが権次の言うように、ぴよこんと兎の尾のように、頭の後につき出していた。権次はそれを、指さしながらはやしたてた。のん子はそれに気づくと、顔を赤らめたが、

「何が兎のしつぽだい。」

と、いきなり頭に手をやると、ゆわえてきたばかりのリボンを、下に払い落した。

「なんだ、虎刈頭。」

のん子も権次の虎刈頭を見のがさなかった。

「兎のしつぽ。」

「虎刈頭。」

「おてんば。」

「イ——だ。」

のん子も権次には、負けてはいなかった。権次の鼻先に、長い舌を出して見せると、カバンの音をさせながら、かけ出していった。

「のん子のおてんばやろ——」。

権次は、のん子の後姿に向かってどなった。

「オトラ、トラトラ、トラガリアタマ……。」

のん子のはやしたてた歌声が、くやしがつている権次の、耳もとを、かすれていった。

「あいつ、おてんば娘だ。」

「うんと、とちめてやればいい。」

甚吉は、横あいから権次に加勢して言った。今までさほど、気にもしていなかった権次だったが、のん子に虎刈頭といわれると、急に頭が気になりはじめてきた。

「甚吉、オラの頭、本当に虎刈頭か。」

権次はそう言いながら、甚吉の鼻先に頭をつき出して見せた。甚吉は何か、こわいものでもさわるようなかつこうで、二、三度、権次の頭をなぜまわしてみた。ごそごそして波をうっている。確かにのん子の言う通り、虎刈頭だった。けれど甚吉は、権次に、悪いように思えて、本当のことはいえなかった。

「たいしたこと、ない。」

「そんなに、目立たんか。」

「う、うん。そんなに目立たん。」

「本当に目立たんか。」

「う、うん。この辺が少し虎だけで、あとはたいしたことはない。」

甚吉はすまなそうに長く残っている所を、指先で、なぜて見せた。

「特別ひどいところの辺だ。」

「ここ……この辺が少し大虎で、あとは、だいじょうぶだ。」

権次は、そつと、甚吉の指先がふれたあたりに手をやると、なぜまわしてみた。特に、ひどく残っているところは両耳の近くだった。このように、あつち、こつちの髪の毛が、残ってしまったことは、権次の家のバリカンが切れなかったせいであつた。

昨晚権次は、母親の常^{つね}にしいられて、頭を刈つたのだったが、その時、何度も髪の毛をくいとられ、そのたびごとに、

「いててて…… いてえでねえかよう。もう少し、静かに刈れつてばナ。」

と、口をとがらせた。そして、亀の子のように、だんだん首を引つ込めていった。涙なぞ出すまいとするのだが、くい取られるたびごとに、でかい涙がこぼれ出てどうにもならなかつた。

「男のくせに、この位でいたがるやつがどこにあるだ。弱虫野郎メ。バリカンちゆうもんはナ、この位、くうのはあたりまえじゃ。」

常^{つね}の節くれだつた手が、縮んでいく権次の首筋をつかむと、グイッと引きあげた。

「かあは、少しむちゃすぎるで。」

「何がむちゃじゃ、つべこべゆわんと、じつとしていれええ。」

常^{つね}は、権次のいたさなど気にもとめず、ガリガリ、バリカンを動かした。いくすじも、バリカンの通つた跡が、権次の頭に白くついていった。

「もうこれ位でええ、少し位残つていてもすぐにのびてしまふ。」

常はそう言う^{つね}と、権次の首にまきつけた手ぬぐいを取つて、二、三度頭をなげまわした。

「湯へへえつて、よく頭のあか、落すだ。真黒けでねえかヨ。あしたは、学校だんべに。」

衿首に入つた小さな毛が、チクチク、首すじをさしてかゆくならなかつた。それでも権次は、さっぱりした気持ちだつた。

小倉の子どもたちは、権次と同じように、みんな家のバリカンで頭を刈つてもらふのだつた。床屋にいきたくも、小倉部落には床屋はなかつた。そればかりではない。床屋で頭を刈ることは、年に一度あるかないかで、特別のできごとでもない限り、大人の人たちでも、床屋に出かけることはなかつた。子どもたちは、みんな髪の毛が伸びると恐しがつた。どこの家のバリカンも、あまり調子のよいものはなかつたからである。それだから子どもたちは、少し位毛が伸びても、なかなか刈ろうとはしなかつた。なかでも、権次の家のバリカンは、特に調子が悪く、上刃と下刃のすり合いがうまくいかず、必ず二、三度は頭を刈りながら、上ねじの調節をしなければならなかつた。そんなことだから、いつも権次の髪の毛は、学校一番伸びていた。

やつとの思いで頭を刈つてきた権次してみれば、虎刈頭^とと、あざけられたことは心外だつた。怒つてもしかたがない。そう思つてみたけれど、むらむらする権次の気持ちはなかなかおさまらなかつた。『兎のしつぽ』なんて言わなければよかつたと、思う気持ちと、あざ笑らわれたくやしさが入り乱れて、権次をことさら、腹立たせていった。

――なあに、一・三日すれば頭の毛が伸びて虎じゃあなくなる。――

権次は、やりばのない腹立たしさを、自分で自分の心の内に、そう言い聞かせてなぐさめた。

のん子が走り去つてから、ややしばらくして、和久平、孝助、三吉の兄弟がやつてきた。孝助が入学する時は、ほ

